

## 井沢弥惣兵衛為永年譜

1663	寛文3	紀州那賀郡溝口村(海南市野上新)に生まれる※1
1690	元禄3	紀州2代藩主光貞より召しだされ(28歳)、3代綱教(つなのり)、4代頼職(よリモと)、5代吉宗、6代宗直に仕える。
1696	元禄9	井沢弥惣兵衛の推挙で?大畑才蔵※2、紀州藩に登用される(59歳)。弥惣兵衛の指示、才蔵の計画立案・指導で「 <b>藤崎井用水開削</b> 」測量。
1699	元禄13	「 <b>藤崎井用水</b> 」幹線水路開削、約23km、実質117日で完成。
1707	宝永4	紀州藩御勘定人格大畑才蔵 60歳、井沢弥惣兵衛45歳 「 <b>小田井用水</b> 」第1期工事3月着手、翌年末完成。25の工区に延11万人投入。9ヵ所の伏越・8ヵ所の掛度井(無橋脚の「龍ノ度井」含む)。 10月4日、宝永大地震(紀州沿岸大津波)による災害復旧工事。 蛇行はなはだしい「 <b>亀ノ川</b> 」の直線化改修と築堤。
1709	宝永6	1月～6月「 <b>小田井用水</b> 」開削第2期工事。
1710	宝永7	4月20日 紀州藩若山会所役人御頭分(48歳)。 井沢弥惣兵衛「 <b>亀池</b> 」(1月着工～4月完成。10ヵ村55000人動員)築造。 「 <b>小田井用水</b> 」第3期工事(1～3期全工期10余年、延22万3000人余動員) 小田井により多くの溜池が廃止され、1046町歩の新田開発が行われた。
1711	正徳1	弥惣兵衛為永の子、楠之丞 <b>正房</b> 誕生。
1716	享保1	吉宗が將軍職を継ぐ
1720	享保5	大畑才蔵没(79歳)
1722	享保7	弥惣兵衛為永紀州より江戸に召し出される(60歳) 10月20日 琵琶湖開拓地検視
1723	享保8	7月18日 御勘定となり200俵を賜る。これより幕臣となる。7月20?21?日 吉宗に拝謁。 <b>荒川支流市野川付替え。(現流路)</b>
1724	享保9	吉田用水掘・飯沼(茨城県)検視、印旛沼(千葉県)開発計画立案。
1725	享保10	1月10日 飯沼干拓起工、5月1日 飯沼干拓完成、吉田用水堀完成。 11月 御勘定吟味役格、11月6日 新田見分のため武蔵・上野・下総を見分。
1726	享保11	吉田用水堀完成
1727	享保12	6月25日 勘定役吟味役新田開発専管となる。 江戸川改修。飯沼川開削と飯沼干拓完成。 <b>9月 見沼代用水開削着工</b>
1728	享保13	<b>2月 見沼代用水完成</b> 手賀沼・印旛沼開発
1729	享保14	多摩川改修、 <b>中川改修・小合溜井造成、中条堤延長</b> 、飯沼干拓完成。
1731	享保16	功により300俵を賜る。勘定吟味役に。6月13日 甲信の河川改修、 正房(弥惣兵衛の子)川口門樋築造。 <b>見沼通船堀完成</b> 。 8月5日 越後河川巡視を命じられる、10月5日吟味役本役となる
1732	享保17	8月27日伊勢・甲信、10月28日越後、11月13日駿遠の河川巡視を命ぜられる。12月28日大井川巡
1733	享保18	10月28日 伊勢見分
1734	享保19	大井川浚利を命じられる、甲斐国検視
1735	享保20	美濃郡代を兼ねる、8月21日美濃笠松陣屋に着任。 息子正房両番格となり300俵賜り、父の勤めを助ける
1736	元文1	4月28日 大井川普譜を命じられ息子正房と共に役につく。 5月26日 大井川の修理を果たす、小判5枚を賜る。 美濃郡代兼務中に木曾三川分流計画を立案。為永没後16年後の「宝暦治水」で実現。
1737	元文2	9月5日 病のため美濃郡代を免ぜられる。
1738	元文3	1月 野上八幡宮に田地(石高4石1升3合)を寄進。 <b>3月1日 弥惣兵衛為永没(76歳)</b> 。墓は千代田区麴町心法寺。 6月2日 勘定奉行支配両番格正房家督を継ぐ。
1767	明和4	<b>10月 紫山(白岡町)の常福寺に見沼井筋の村民が墓石建立。分骨?</b>
1817	文化4	<b>3月 見沼区片柳万年寺に「頌徳碑」建立。</b>
1861	文久1	幕府普請役萩野拾次朗為永の位牌を紫山常福寺に奉納 ?

※1野上新の井沢家に伝わる「井沢系図」では、清和源氏の流れを汲み、八幡三郎義家の弟・義光から4代目の信義を井沢家の始祖としている。信義から15代目の政国(弥惣兵衛の父)が根来寺に入り、両界院深勝浄快と名乗り、同寺六将の一人に数えられた。根来寺廃滅後溝ノ口に移り住んだらしい。

※2和歌山県橋本市発行の『大畑才蔵』(平成5年刊)は、『才蔵日記』『村々見聞書』『普請方覚書』『在々御用』『百姓渡世(地方の聞書)』『先祖書』に類別された大冊。総称して『才蔵記』と呼ばれ、才蔵研究の基本資料になっている。他に農政事務や農業経営にも精通し、多くの著書を残した。

■埼玉県土一河川と農業用水の歴史より

新生代	第三紀	古第三紀	6500万年前	ヒマラヤ					
		新第三紀	2330万年前	日本列島	造山運動				
	第四紀	洪積世	160万年	氷河期	100万～40万年前				現在の山河の基本形(外秩父山地隆起→荒川流路北へ)
					10万年前				荒川扇状地・大宮台地堆積 関東造盆地運動→加須低下
					3万5000年前	旧石器時代			
					2万年前				中川・荒川流域地下谷ピーク、間に大宮台地
		沖積世	1万年前	温暖化	1万5000年前				
					7000年前	長江中下流域で稲作(稲作・ヒエ・アワ5000年の蓄積→日本列島)	縄文時代	「縄文カレンダー」に基づく食生活	縄文海進→沖積低地(地形区分で最も低い土地、埼玉県土の約4割) 櫛引台地と江南台地分断、荒川新(熊谷)扇状地
					5000年前				
					2700年～2600年前	稲作朝鮮半島南部→西日本「板付遺跡」	弥生前期		
					2400年～2300年前	稲作西日本→東日本	弥生中期		東日本、縄文食をベースに試験的稲作(酒?)→十数人の小規模ムラ
					前1世紀		弥生中期後半		100～200人規模、1000人規模の農耕のムラ 埼玉は小規模「北島遺跡」熊谷市上川上……星川 荒川新扇状地先端部に「池上遺跡(熊谷)」「小敷田遺跡(行田)」
					後1世紀		弥生後期前半	農耕のムラ激減(埼玉はポチポチ残る)	
					2～3世紀		弥生後期中頃		静岡以西から移住者? 低地に大規模ムラ
					4～5世紀	<古代> 大和王権(4世紀半ば) (鉄と渡来技術を独占、皇位継承・豪族間争い)	古墳時代	大仙陵古墳(仁徳天皇陵、5世紀前期)	「熊野神社古墳」(4世紀後半、現荒川水系(熊谷-秋ヶ瀬)最古の古墳)
				6世紀	飛鳥時代 白鳳時代(646) 奈良時代(710) 平安時代(794)			「相模田古墳」(500年頃、120m、大仙陵古墳の1/4) 「野本將軍塚古墳」(500年頃、115m)	
				7～12世紀			「班田収授法(646)」→全国に条里水田 <加須低地> 「熊谷・行田条里」 「神戸条里」「野本条里」「高坂条里」「入西条里」「田面沢(たのもざわ)条里」「古谷条里」 ↓ 大宝律令で国・郡の行政区画=河川流路 鬼怒川付替え工事完成(768) 荘園の増大(荘園最大の持ち主=藤原氏) ↓ 墾田・防衛→武士団の台頭 清和天皇→源氏 桓武天皇→平氏(北条・土肥・三浦・鎌倉・上総・千葉・秩父諸氏)→秩父将常→4代重綱→畠山・河越・江戸・渋谷・河崎・豊嶋・葛西等諸氏 地方豪族=武蔵七党(横山・猪俣・野与・村山・児玉・丹・私市(きさい)・西(府中)・諸党		

<p>12～15世紀</p>	<p>&lt;中世&gt;</p>	<p>鎌倉時代(1192) ↓ 南北朝時代(1333) ↓ 室町時代(1338) ↓ 墾田&amp;武装集団(武士)の働きで中世半ば、武蔵国の水田開発は約15,000haに及んだ。中世の400年間は全国的にも水田開発が進み、84,000haほど増加したが武蔵国はその1/5を占める。</p> <p>&lt;応仁の乱&gt; 戦国時代(1477) 土木技術水準が高まる <b>15世紀後半に蓮田台地開削</b></p> <p>新扇状地、主要流路は河川に、小さな流路は農業用水路に ↓</p> <p>安土桃山時代(1568) ↓</p>	<p>『吾妻鏡』1194(建久5)11月2日条で翌3月までに武蔵国大田荘(騎西領用水左岸一帯)堤の修固完了を御家人に命じる。 『吾妻鏡』1199(正治元)4月27日条東国地頭に荒野の開発を命じる。 『発心集』鴨長明「武蔵入間河沈水の事」(1211、館首は河越重時又は重員) 貞永元(1232)鎌倉幕府、樽沼(くれぬま・坂戸市横沼?)堤の修築を地頭に命じる。</p> <p>&lt;中世後半のできごと&gt; ・新田義貞(源義家次男義国長男義重～)、鎌倉幕府を陥落させた(1333)後、足利氏と争い滅亡(1357)。 ・河越氏は「武蔵平一揆」を率いて鎌倉府連合軍と戦い、<b>400年の歴史に幕を閉じる</b>(1368)。</p> <p>・その後、鎌倉公方と関東管領上杉氏の間で20年にわたる戦い。鎌倉公方成氏の古河逃亡で(1455)、関東を制した山内・扇谷両上杉氏と古河公方が対峙。 ・扇谷上杉氏、武蔵・相模を支配し河越を拠点とする(1449)。57年太田道灌父子に古河公方の押さえに河越城・岩槻城・江戸城を築かせる。 ・太田道灌、武蔵・相模で活躍し、扇谷を山内を凌ぐ勢力に成長させる。これを恐れた山内側の諫言で扇谷上杉定正が太田道灌を謀殺(1486)。道灌の死後、山内・扇谷上杉氏は反目し「長享の乱」に発展。扇谷が築いた松山城(吉見町)は山内が拠る鉢形城(寄居町)の向城になって、相模・武蔵は20年にわたる覇権争いの戦場になった。</p> <p>・この上杉氏内紛にまぎれて力を付けたのが北条早雲。早雲の登場で本格的な戦国時代を迎え、藤原氏の流れをくむ両上杉氏滅亡(河越夜戦・1546)</p> <p>熊谷堤(1574・天正2)・権現堂堤(1576・天正4) 後北条、秀吉の小田原攻めで滅亡(1590)</p>
----------------	-------------------	--	--

1590(天正18)		家康関東入国	道三堀・小名木川 小石川沼・赤坂沼から江戸水道	伊奈氏初代備前守忠次小室(伊奈町)に陣屋
1592(天正20・文禄元)			千住大橋架橋	中条堤(1592・天正20) 会の川締切り・蛇田堤 「亀有溜井」→「東葛西下之割用
1600(慶長5)	(9月関ヶ原)		六郷橋架橋	
1603(慶長8)	<近世>	江戸開府	「の」の字の堀で江戸城・城下建設＝神田山(駿河台)切崩し→日比谷入江埋立て、前島拡張→江戸湊整備、平川(日本橋川)下流整備・日本橋架	<その他慶長期事業(忠次)> 「荒川五堰」(慶長7～) 「末田須賀堰」 備前提 土屋古堤 川島領圍堤修固 「備前渠」(慶長9)→「北河原用水」→羽生領
1606(慶長11)			本丸完成(秀忠)	
1613(慶長18)				八条領落堀(慶長18)→綾瀬川→亀有溜井(忠政)
1614(慶長19)	(冬の陣)			「鷲後用水」→「瓦曾根溜井」→「八条領用水」「四ヶ村用水」
1615(元和元)	(慶長20/夏の陣)			成田堰用水→「荒川六堰」(忠政)
1620(元和6)			江戸城総構え一期工事完成(神田山開削＝神田川→隅田川) 日本堤(元和7とも)	
1621(元和7)				新川通開削、川口辺りの河川廢川化 決壊流路(現権現堂川)を利根川流路に 八条領落堀拡幅・瓦曾根溜井に取水口→「葛西井堀」→綾瀬川→亀有溜井 (3代忠治)
1629(寛永6)			倉庫群下町へ進出	荒川瀬替え(江戸期放水路) 「見沼溜井」→「見沼用水」 瓦曾根溜井に葛西井堀の元坎(8間)→綾瀬川→亀有溜井
1630(寛永7)				中島用水(→椿地先・庄内川→大塚→樋堀→古利根川→「松伏溜井」)→後鷲用水→瓦曾根溜井
1635(寛永12)			江戸城総構え二期工事(1635・寛永12、江戸城北西部の外堀開削、赤坂溜池→四谷→神田川)	<その他寛永期事業> 綾瀬川直線化(谷古田領の迂回路路) 新綾瀬川(内匠新田一小菅に新流路開削)
1640(寛永17)			家光、本丸・大天守再建(1637～)。金の鯨輝く大天守・江戸城完成	騎西領(日川)用水整備(寛永～正保)
1641(寛永18)				江戸川完成 (寛永12着工、関宿一金杉開削、太日川下流部につなぐ) 利根川・渡良瀬川→権現堂川→江戸川→江戸湾 江戸川→中島用水→……瓦曾根溜井
1643(寛永20)				忠治、日向堰が大水で流れ、北河原堰を伏込むとある。
1654(承応3)			玉川上水完成	赤堀川(元和7、寛永12、3回目)→利根川東遷事業(江戸期放水路)完了 (4代忠克)

1657(明暦3)			<b>振袖火事(家康・家忠・家光3代で築いた華麗な江戸の城と町壊滅)</b>
1659(万治2)			豎川(小名木川北に並行) 大横川(南北軸) 横十間川(南北軸)
1660(万治3)			江戸城総構工事終了 大橋(両国橋)架橋  源森川(万治年間) <b>北十間川</b> (寛文3、大横川 と中川をつなぐ農業用水 路)
			<b>幸手領排水整備(神扇落、安戸落、倉松落→大落古利根川)</b> <b>「幸手領用水」整備</b> <b>利根川(本川俣)→川口→北側分水、</b> <b>→琵琶溜井→中郷・南側用水)</b> <b>→大落古利根川→瓦曾根溜井</b> (忠克) <万治年間事業> 松伏溜井→ <b>「二郷半領(本田)用水」</b>
1675(延宝3)			瓦曾根溜井の八条塚と葛西塚の間に <b>「本所上水」</b> 元塚設置。 古綾瀬に懸樋 (5代忠常)
1680(延宝8)			古綾瀬川(垢川)に <b>「久左衛門新田小溜井」</b> →淵江領の用水 <b>新綾瀬川大規模改修</b> (小菅一隅田川直線化、堀切一上木下村 (東四ツ木)に綾瀬川放水路開削→中川) <b>綾瀬川堰止禁止</b> (以来、排水専門河川に) (6代忠篤)
			<延宝年間> 瓦曾根溜井に <b>「谷古田用水」</b> 元塚 この頃までには、 小合川屈曲部に番免(馬面)塚→ <b>東葛西上之割</b> 古隅田川を締切り亀有溜井から引水→ <b>西葛西領</b> 新綾瀬川以西・西淵江領 <b>「見沼用水」</b> 新綾瀬川以東・東淵江領 <b>「久左衛門新田小溜井」</b> (忠篤・7代忠順)
			<b>東西葛西を含む武蔵東部低地の利根川利用の用水系完成</b>
1701(元禄14)			<b>「見沼用水改良計画(延宝元(1673)の絵図)」</b>

1704(宝永元)			宝永元年洪水 <b>利根川破堤</b> 武蔵東部低地浸水、埼玉からの物乞い江戸に溢れる	本所上水埋掘→廃止(享保7)  中島一帯泥土堆積 猿ヶ俣破堤で亀有溜井も泥土堆積
1705(宝永2)				<b>亀有溜井上流側の堰撤去</b> (忠順) 古利根川は小合川筋と中川筋の二派に
1719(享保4)			町方人口調査50万人。 武家推定人口50万人。百万都市に(享保6) ※ロンドン50万人前後、パリ50万人弱	上川侯に <b>葛西用水元坎</b> (8代忠達・石川伝兵衛) ⇒「 <b>埼玉葛西用水</b> 」 川侯水利組合成立
1728(享保13)				<b>利根川→「見沼代用水」</b> (井沢弥総兵衛為永) 見沼用水の水源を利根川に求め「見沼代用水」開削 農民・江戸町人に溜井跡の新田開発を許可
1729(享保14)				亀有溜井下流側の新宿堰撤去= <b>亀有溜井廃止</b> 中川3、4倍に拡幅= <b>古利根川下流部</b> 亀有溜井に代わる「 <b>小合溜井</b> 」 (井沢弥惣兵衛)
1730(享保15)				松伏溜井→二郷半領本田用水拡幅→小合溜井 →「 <b>上ノ割用水</b> 」(上下つないで東葛西の「 <b>上下之割用水</b> 」) 瓦曾根溜井→ <b>葛西井堀</b> =「 <b>葛西用水</b> 」→久左衛門新田小溜井 → <b>本所上水跡</b> =「 <b>西葛西用水</b> 」→北十間川⇒「 <b>東京葛西用水</b> 」 (井沢弥惣兵衛)  ●利根川の水を本川侯と上川侯で取水し、琵琶溜井－松伏溜井－瓦曾根溜井と送り、松伏溜井からは東葛西領、瓦曾根溜井からは西葛西領に至る遠大な水ネットワークが構築された。利用領域は幸手領、松伏領、二郷半領、新方領、東葛西領(上下之割)、八条領、谷古田領、淵江領、西葛西領、形10ヵ領が一つの「 <b>葛西用水組合</b> 」にまとまった。村数300ヵ村、村高合計13万2700石。
1731(享保16)				<b>見沼通船に閘門式運河</b> ※「高瀬通」(延宝元(1673)・岡山県) 「倉安川吉井水門」延宝7(1679)・岡山県 「通惠河」(13世紀、クビライ)
1742(寛保2)			<b>江戸期最大の洪水氾濫</b>	
1754(宝暦4)				延享元(1744)の出洲で引水不可→蓑沢までの井堀 <b>不用堀</b> に
1786(天明6)			<b>利根川・荒川洪水氾濫</b>	
1838(天保9)				<b>合の川と浅間川の締切り</b>
1846(弘化3)			<b>利根川・荒川下流部洪水氾濫</b>	
1867(慶応3)			大政奉還	

## 見沼代用水路開削

元和7	1621	新川通開削	
寛永6	1629	<ul style="list-style-type: none"> <li>・見沼溜井造成</li> <li>・荒川付替え</li> <li>・葛西井堀の元坎瓦曾根溜井に設置</li> </ul>	<b>「見沼用水」</b> 9ヵ領221ヵ村 (谷古田・平柳・舎人・淵江・安行・戸田・笹目・浦和)
寛永7	1630	「中島用水」	新綾瀬川開削
寛永18	1641	江戸川開削	新綾瀬川以西は見沼用水
承応3	1654	赤堀川開削	
万治3	1660	忠克 利根川本川俣に元坎設置 「幸手領用水」	北側・中郷・南側用水
延宝元	1673	新用水路計画絵図面	
元禄14	1701	<b>「新用水路計画」出願</b> 五丁台で元荒川を堰き止め用水を貯留→台地開削→見沼に導水 上崎堰を巡る争い<騎西領(星川からの取水に堰上げが必要)と忍領(排水障害)> →騎西領には新規に利根川から取水。 末田須賀堰は星川の水を利用  流域の村々の名主も同意。理解の対立する忍領・騎西領・岩槻領の藩役人の了解済み。 見沼へ新しい水源から導水・上流部の諸課題解決 とくに忍藩・岩槻藩・川越藩(元禄7年～柳沢吉保。騎西領の一部を支配＝会の川旧河道を騎西領用水に整備)の利害調整済み。	
元禄16	1703	<b>導水路沿川村々による導水路開削            反対の請願書提出</b>	現上尾市(原市村・菅谷村)、大宮市、蓮田市、伊奈町にまたがる14ヵ村
享保13	1728	享保7年(1722)井沢弥惣兵衛為永幕府に登用(69歳) 享保10年(1725)9月現地入り。見沼用水灌漑村々の中には不安視。 享保11年(1726)8月見分のための現地入り。すでに測量終了の触書。 享保12年(1727)8月着工 12年2月「見沼代用水」完成完成 利根川下中条に元坎→星川→騎西領用水に分水→八間堰で星川と→東縁・西縁→見沼用水  <ul style="list-style-type: none"> <li>・綿密な計画(星川利用)</li> <li>・周到な施工体制(丁場割。丁場ごとの資料・必要人足数、一人が一日に運ぶ土量や運搬距離、堀溝や築堤の労力算出。丁場単位で一斉着工。)</li> <li>・測量技術(水盛器)</li> </ul> <b>※「見沼代用水」とは、見沼溜井から引水した「見沼用水」に代わる用水の意味。</b>	
		見沼溜井跡の新田開発は、沼周辺の17ヵ村が許可を受け造成。周辺村々とは別に、江戸の町人からも新田開発の申請が前々から出されていたので、3人の町人に100町歩(100ha)の開発を請け負わせた。中央に排水幹線を開削し、干拓地の排水路(芝川)とした。1100町歩の美田に生まれ変わった。	
		見沼代用水路の幹線用水路は約84km。灌漑面積は約17000町歩。用水路とともに開発された新田は、ほかに600町歩。	
		<b>「水盛(測量)台」『才蔵記』より</b> 水盛りには水盛台(水準器)を使用。中央の漏斗状の口から入れた水が、両端の口から同じように出ていることで水平を確認する。水盛台を水平にした際に手元の見当と前方の見当の地面からの高さを測り、両者の差で求めた。6人で取りかかり、水盛台のほかに長さ3.6mの竿2本、水盛台を乗せる角木2本、土や杭、合図用の扇、合図用しるし竹、鍬、唐鍬、鎌、鉋等を使用。 井沢弥惣兵衛の測量は60kmで6cmの誤差。	